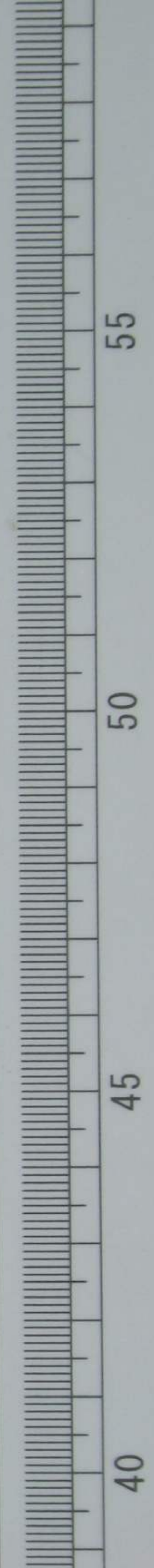
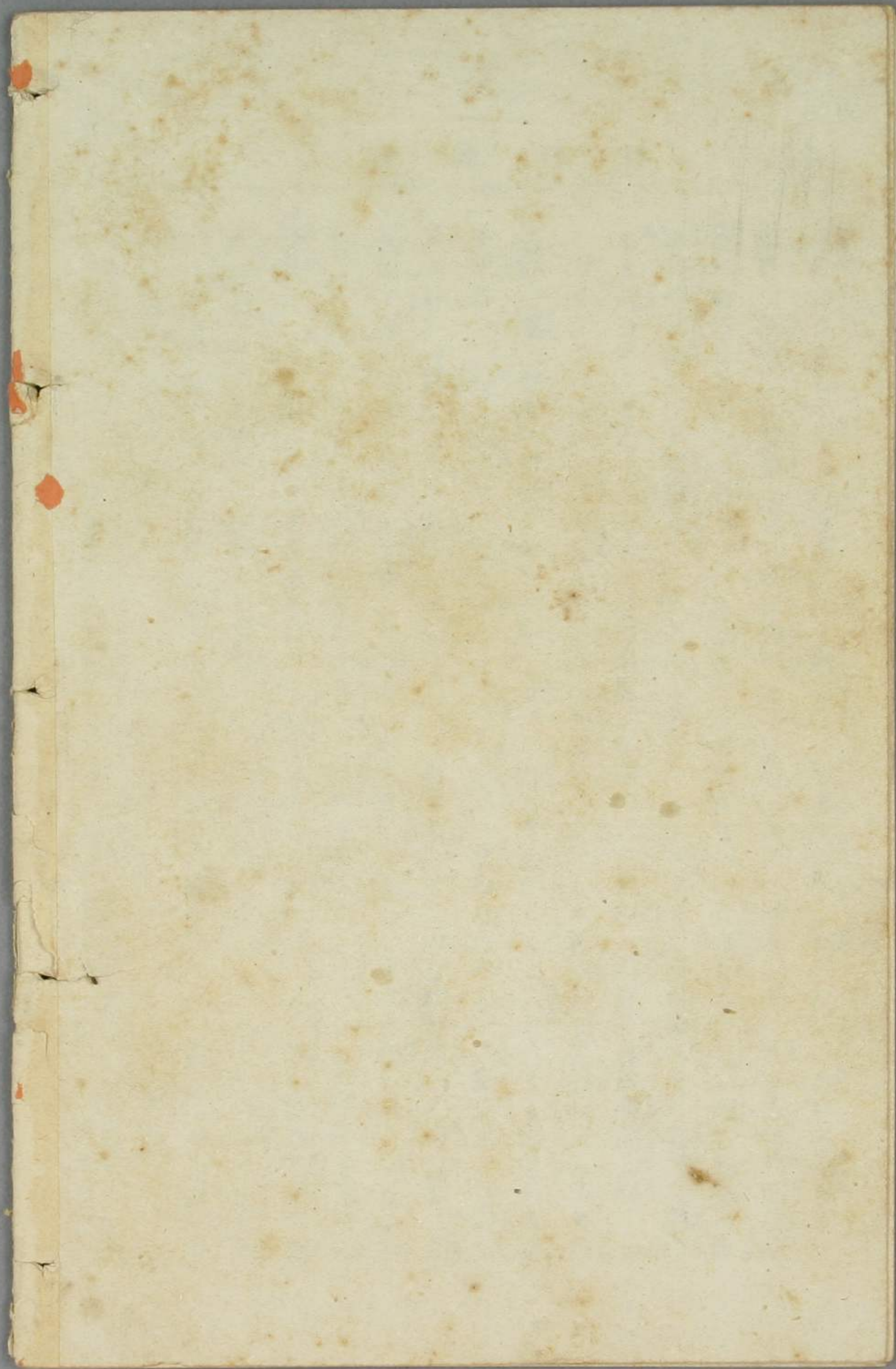




讀賣新聞四千八百六十六號附錄 明治廿四年十月







名文界 底知らぞの湖

坪内逍遙

昨夜の夢に怪しき事と見たりけり處にいづことも知らず湖と見れば池池と見れば沼沼と見れば湖のやうなるものこそありけれ周圍一町ばかりと見れば一二里も十餘里もあるべからんと見えざるが其形庭鳥の卵のやうに圓くして始も無く終も無しそがあさりの山山に春夏秋冬一時に來てありとおぼしく櫻桃杏李句ひと競ひ秋艸紅葉色と争へり仰げば大空に沖る峯々長へに高く瞰せば滿々たる水の色八千代に清むめり渦巻く深き淵に蛟龍も棲めるあるべく漲りおつる瀧津の音の空に知られぬ電霆の響ともさかるべし爰に狹霧の立籠る黠憎る洞穴あり打見ざる所いと淺く狭やかあれども窺

へば其深きこと幾万由旬とも知る可らばこれのそもいづれへ通ふ路
 からん見かへればそよくと吹く春の風暖かにして鼻々たる青柳の
 住人の緑の髪と梳りふくみそめたる八重櫻の紅させし女童の可憐口
 元にも似たりけり彼處に梅の花白く鶴かりて月下に箔と曳く高
 士の魂と消し此處に冬枯の薄がくれに危げある丸木橋のかゝれる
 が十徳の袖に世の塵拂ふ数奇人の心ともどらかさんとそ我笑ひて見
 てわれは山水悉く笑へるが如く我悲みて向ふとき風物をべて泣け
 るが如し嗚呼是極樂の浄土り黃花黃葉水に映じて水底に金沙と布
 き夏の木實秋の果七重の行樹に爛熟しての燦然たる七寶眼と射る或
 りまゝ天上の樂園り金翼の奇しき鳥神々しく歌ひ白色の異しき花神
 神しく舞ひて天上の舞樂と聞くがごとし或るまゝ仙人の棲める所り
 徑窈窕より天空明より白雲心無うして自然幽といで碧氷情あるが如

く紅葉と載せて逝る、そもまゝ此れは是大俗の人間境り妖嬈たる牡丹
 の花雨と帯びて裸躰の美女浴後の嬌態と銜ひ風のまゝある青柳の
 玄かひにの女性の男の媚びも見えたり嗚呼是何といふ變幻魔界ぞ一
 面にして百面と具へ一相にして万相と兼たり春うと思へば秋、秋りと
 思へば夏、冬、多、笑へるが如く怒れるが如く悲めるが如く歡べるが如
 く俗あるが如く雅あるが如く正あるが如く奇あるが如し咄々何とい
 ふ怪現象ぞや
 恍惚として見やるあかさに雨露に曝る高札ありけり近よりて見る
 に幾百年とや經よりけん書きたる文字の形も定りあらぬと辛うじて
 「文界名所底知らせの池」とまで讀み得つ奉行の名も年月も知るに由
 無し然るあひぶ何の發明したる所もあければ只茫然として立どま
 りてありける程にいつの間にもいつの間にいづこより來にけん道服とやいふも

の被て物々しき容貌しふる翁右手に大なる扇もち左手に太き筥と
 提げて且あふぎさて且打叩きつゝ來にけりそが後よりあうく觀光
 夫子待たまへと叫びつゝ來るものと見るに一人の浮屠の道心と見え
 一人の基督教と信ぜる人と見えより聽て三人一團にありて或る松の
 根に佇立み遠近の景色と打眺めてありけるが夫子先づ感歎の掌とは
 すと拍ち天夕下の人舉りて此湖の風景と稱し空前絶後の名所ありと
 いへることを實にやげに真ありけりわれ見られよ波穩りある所に鴛鴦
 の睦じう浮きて遊べるの夫婦の義と見せざるあり又枯枝にどまれる
 鳥の反哺の孝とはのめかしふるにや面白し此水に智ありかしこの山
 の仁あり梅の雪霜にめげせ是節あり松柏の凋に後る是操ありさても
 柳の君子温厚の徳と見せざるにういとめでし惟るに朽ふる獨木橋
 の太古質素の徳と表し花紅葉の散りゆく奢るもの久しからせとい

ふ必さらん沙門聽きて顔にうあづき花紅葉にの色即是空の相見え此
 の静水觀に眞如現せかしに繁れる木々其數と知らせ案ぜるに八万
 四千の煩惱に喩へざるあらんこゝに咲ける櫻桃杏李の其實の熟ふる
 とも共に見せざる是豈生死の園の様にあらざらん此に死に彼に生れ
 惡に報ひ業に因る榮枯盛衰の理因果應報の實明か也三界二十有五界
 の喩あるべしあれくあうたかたの泡よ有るかと思へば無し觀せ
 れば如露亦如電さてく墓無き浮世ありけりと歎かるゝと基督信
 者徐かにあぶめて否とよ散る花の中に結べる實と見せうつらふ紅葉
 の間に春の芽ざしとはのめかしふるの末の望の影映れるあり且いま
 此湖の水流れく蒼茫の海におもむくとうや此湖とて地球の
 生活に比しりとせば蒼茫の大海原の無限無究の天堂生活にや比へ
 ん Lord なるにてもあしこのおそろしげある洞門の何ぞのものぞや

傳へ聞く天門の邊にも地獄に通ずる道のありとこれおめりくかし
 こし尊しまこといしくも作られざる神の湖を併しおがら斯う見
 ざる所の流石に氷の淺うも見ゆる少些とばかり歩渡りして見ばやと
 いふ夫子も沙門も之れに同じて三人おがら尻端折りして崖とおり一
 足ふみいれてや思ふに似せ深かりといひく又一足進めて彌深し
 三足四足いよく深しいよ深しと調子づきてそよまれけるが見るみ
 る深みへはまり圓頭も黒き頭も無残や跡形もあくありけり
 とばかりありて又も人の來るけはひしけり見れば頭に古風ある帽
 といたゞき身に長短のいとよく適ひて文章粲然なる衣と裳とと被
 て手に規矩準繩と握り背に辨慶といふ猛者のやうに七道具と負ひ
 腰に艶ざし磨粉艶布巾おどいふ種々の機械とさげさる人來にけり
 先づ懐中より時器と取で時刻と計りやがて又前と後とと願みて今

あめめるの我りは他りと哲學者といふものやうに自他とたゞし
 扱後一二三四と跛行蹉行跲行難行してやうく岸頭に歩み近づき
 あはれこよあうも美しう出來さる湖かお水に波瀾ありて山の姿に起
 伏あり奇巖怪石龍の蟠り虎の嘯けるが如き隠微にして花の笑ひ尾
 花の人と招けるの活喻とやいはん矗立千尺の老樹の崇高の相にして
 玲瓏さる小鳥の聲の正さに美麗の音とをべし爛熳さる春の花にいへ
 ば更さる秋の眺めの種々とも一所に取り集めさる所謂統一の中の變
 化とい是あらんいと奇しいとも妙ありさて又山ともて水に對し花
 ともて實に對し此照對頗るめでさし唯可惜しきあしこの瀧津瀬の
 氷玉あり玉の如く進しければこそ氷玉あるべけれ雪のやうに翻へるの
 いかによや二つに此方のテヲ棄ちり散布くまじさあふりにみぶ
 りがはしう散りさるいと醜くしさもあらばあれかふらん白壁の微

瑕として怨せべし只夫の紅葉の下に猪の影見之萩の下枝と狹雄鹿の
 かきわきて歩みいでるぞ木に竹とつげる心地をふる搔も消しし
 いかにせましやあどうめかるる程に忽ち老樹の背とめぐりて出来つ
 る人ありけり見れば額白頰奇にして頭腦の大なること万巻の書と
 容るに足るべく眼光の鋭きこと一瞥十餘行の字と讀むにも適ふべ
 し身に朱唐紙とて製りたる紙子羽織を被て頭に羊羹色の和冠
 といたしき右手に枝折形の笏と握り左手に管城子と名づけたる
 杖つきからし右の足砂利に觸るれば俯して其の黑白と檢め左の足木
 の葉に觸れば又俯して其質を査めやうくにして此方に近づきいか
 に文章のぬし此湖の景色といかさまにう見たまひつるげに比ひもあ
 くめでさく候はせや見そあはせ彼處に亭々たる松の正しく高砂の松
 と祖とせるさり此處に咲亂れたる櫻の如意輪堂の南のかさ何某とい

ふどころより移せるありあべての風景の西湖に形取れること明かに
 して遠近の山々の瑞西の面影とこそ見され殊に嬉しきをそれそのそ
 こに生茂りたる奇草ありこれの本草綱目に見えたる無根草といふも
 のからん又さ感ぜべきのあの楓ぞかし古蘇城外の楓橋より移し植さ
 るにてこそ候はめまことに人此の湖のはどりにたすべ一旦夕にして
 尤き博識とあるべし只一つの懐みの四時の序と紊し春かと思へば秋
 秋かと思れば冬の夏の辨別もあきことこそ無念かれ春あらば紅葉の無
 かるべく秋あらば櫻の咲かであるべきにいかかれ斯う混せざるや
 らん然れども仙人の在る所に歴史も無く四季も無しとさく此處或
 り武陵桃源をらんやも知る可らば心悪きわしこの丸木橋の彼方を
 りといふ文章うあづき巳もあの丸木橋の高く又低く半朽ちてかよれ
 るが抑揚とも見えねばいと怪しうこそ思ひされいでやもるどもに隠

微と探り候はんとして蹉行跛行して先にたつ程に額白頰奇の士もそ夕
 後につきて杖つきあらしどかうして橋のはどりにいで覺束あげに文
 章先づ足と進めやがて三足ばかり渡るよと見る間に、あちめでゝ爰に
 頓挫のありけりと叫びもあへど踏はずして立せころに見えぞありぬ
 後ある人あちやと駭き扱こそ此水にの靈の棲むかれ仙郷にあらざる
 も靈地ちどあるべし近づく可らぞおそろしの物の怪やと舌と巻き頭
 と抱き足と空さまにして身と翻へそよと見るうちに是も杜の茂みに
 影とかくしぬ
 松の風颯々と音して暫し鳥の聲も静かりしが忽ち蹄の音近く聞え
 て向ひの岫々たる崖の上に一人の紳士現れり當世様と旨として製
 らせざる高帽子優にいたゞき千里ともゆくべき逸物にまたがり脚下
 に咲亂れざる千草の花どもに見るにも足らせとて蹂躪り踏碎き仰ぎ

て蒼空の大きあると一睨し俯して湖水の洋々たるを見渡し、およそ山
 水の美人の胸襟と爽にし且つ廣うらしむればこそ要のあれさても
 目ざましく大きある湖かあ世に泉水池沼あといふものゝ夥多あれど
 斯うばかり心地よく大きあるのを見ぞ王侯も爰に龍頭鷺首の御船と
 泛べさせたまふに足るべく蒸漁船といふものも縦に横に走らしむる
 に足らん斯うやうにてこそ湖あれ嗚呼某が空行く船としも此の湖の
 はどりにて飛せあべ佳きが上にもいよゝ佳からんさりあがら此周圍
 をも幾町ばかりあるやらん多くとも一里に越え一めぐりして量
 りて見ばやとてやおらゑとくと馬とやらるゝほどに一町ばかりも
 くほどこそいわれいかにしけん馬の俄に物におどろき直驅にかけい
 ぶしぬ此湖の形の圓ければにや主の踏はじめの所忘れて一向馬の驅
 るに任せてさても大ありさても大ありといひく幾たびもくるり

くるりくるりとまはらるる程に目舞ひ足舞ひ鞍壺に得たまらで生
 の驅めく馬と離れて頭顛倒とおちて崖の下へころりころりとまる
 びおちて深みへ沈まれけるぞ是非無き
 時に大勢の人聲して賤の翁と見えたるもの八人あまりも來にけり其
 たがひの挨拶ふりと聞くに世に謂ふ五人組十人組といふものに似
 れば之と堅くいはいはば俚叟組ともいふべきにや彼等打揃ひて來て何そ
 るにかと見てあれは其中の一人がいふやう此湖の其昔一夜の中に
 來にきとかや山の神我々と憫れみたまひて目と娛ませ心と爽にせよ
 とて作りたまひけるとよこの翁聲高に打消しおろろある事とあいひ
 そ痛く違へり世の末にありにされば身と棄まほしく思ふものも多
 らんさるものこそへ來て身と投げよとて作られさる湖あると娛み
 の料とにちにごとよいひかくると丙がさへぎり措きね汝のいふ所も

見當ちがへり此湖の水の薬水あり病と療治せんが爲の賜ありと知ら
 せやされば其昔と縁起といふものめかして説いでんとすると丁聞も
 果せ止みねく到底足下たちのいふ所の一枚五厘の由來記にある妄
 説といふものありそもや此湖といふ山と得て水媚しく氷と得て山
 明しく山水二つが離れぬといふことと見せんといひかくるとさ
 かべこそあれ庚壬戌癸思ひくは口とひらきて我案によれば云々
 り否々おのれが思ひよれるの箇様々々いふとよ云々ありいふとよ然
 でのちし否斯うありといひつもの角めだち目かどたて立ちかより擲
 みかより掻きむしり立わかれ叩きあひ突きまろばしふしまろび叶は
 じと遊いだそ散々の殺風景此騒ぎに誤りて崖より下へまろびおちて
 氷底に沈みしも多かりけらし
 此有様と杜蔭にたよせみて打笑みつと見てありし若き男ありおもむ

るに岸邊に歩み寛れると見るに頭に擬製の花の自然とあざひける
 と飾としるる美妙ある帽子といたさき身に天工とも驚かすべき精
 巧の織物と衣裳に作りて被り工風と極めたる美しき靴と穿き妙工の
 製りたる望遠鏡ととりいで四方と見わたし莞爾として口を開き絶
 妙風物此自然の美何に喩へて何とほめ何と稱へん稱ふるに言葉なく
 褒むるに言葉おしめでさき此美其物あり然るに何者のおろり心ぞ
 此美と美とせせして勸懲風刺の旨と此中に求め區々小理想と此中に
 求め或の形の大ききあると此美の本体とし或の文章博學の一途に此無
 限の美と歸せんとぞ嗚呼何といふ偏妄狂愚の管見ぞや併しかつら退
 きて惟みるに美妙の靈明の力ばかり歎賞すべきものいあらじ如是等
 偏妄狂愚の徒ごにいつしう無明の間に感孚せられて皆此美の中に觀
 れたりぬあやにかしこきもの美の力あるかあめでたさか上にもめ

でたきいと更に稱美の言葉と繼ぐまくしする折もあれ翻々として最
 より舞ひ出さる一つの蝴蝶の黄金色の翼に雪はづかしき粉帯さるさ
 帽子の花と見あやまりてや眉と掠めて飛びまよふと男見るより神浮
 かれあや麗しあやめでさ美の魂までよと叫びつゝあちこちと追ふは
 ぞに蝶のおちてりひらひらく前にあるかと思れば背あり右手う
 と見れば左手の葉末此さびり得つと走り寄る脚踏くじきて臥まるび
 つゝあややと握る枝折れてぱつと立つ水煙に男の姿のかくれさ
 見るからに身の中汗まるとにて扱もおそろしき湖やげに靈とやらん
 いへるもの棲めるからん長居のたゞりと身とひるがへそ向ひの方
 に悲しや精靈はや化て出にけり嗚呼の白痴汝此湖の景色と如何さ
 まにり見つる我大に狼狽へ何と答ふべきうと知らせ只有の儘に答へ
 ていふやう美しくとも恐ろしとも思ひ辨へせ只來る人ともく關らそ

がおそろし昔にも今にも例さかきといへば例さかきとの物知らぬ汝等の常住言あれどかさはら痛し汝が國にも此湖に似る古池ありけりかしこに生つる松に近き松もありけり松のここの仔細あれいは古池の事といはんはその古池はじめの蛙といふものが只ひとつ飛こめるのみありけるが後に數萬人の人が飛入りなきかも終に充塞りしといふ噂さかねば一定底知らせの池あるべし本来底無きかあらぬかの問ふに及ばせ只其數万人と入れて尙餘あることの著るきと美として彼池とも名所の一とせるのみ我謂ふ名所との俗に謂ふ名所との異なり俗の名所の由来と尊ぶ我名所の今もかほ底知らせあると尊しと池を作りし者の素志如何の問ふ所にあらせ其今日に於ける光景に就きて評するあり中にも此湖の如きの過去現在ともに底と知らざるのみあらせ千古に涉りて底知らせあるべし底知らせとい

無量無数の異類と容れて餘あると謂あり是此湖をもて天下第一の名所とせる所以ありまかれども憐むべし人間の世界にいまだ此にひとしき名所のあらせ只之に似る大沼の英吉利に一ヶ所獨逸に一ヶ所あり英吉利あるの動地の沼(Shake-sphere)とすひ獨逸あるの驚天(Geothie)の沼といふ共に人間の名所あり汝のやうある白痴に斯うやうの事語らんに無益しけれど来る人もく溺らそぞ恐ろしと考へて逃いどしつるに頼の脈のあれべこそ聞かそあれ構へて此湖にはまりあせを溺れせして眺めてこそ名所あれ命あくして何ぞするぞつとと立離れて賞翫せよや白痴と鐵丸のやうある握拳もて小鬚とはと張りどばされ三間ばかり杜のかたへ足地と離れて飛ぶよと思へば去歲の夢の醒め果けり嗚呼の限ある夢ありけり

(完)

伽羅の語

(上)

尾崎紅葉

たゞ戀ゆるの身請にあらざ、扇子に骨あれば男子に意地あり、ふつてく
 ぶり通せし遊女に——我も本町の廣物！——衆の嗤ふほどの未練あ
 るに、いあらねど、思へば遊女も當世の希物、是ほどの男子と袖にして、い
 かる見所ありて、舊時の知らぬ今、紙衣の淺といふ日蔭ものに情
 立て、かれがいひ募らば、理不盡に泣いて詫びあぐら、わが與ふ小判に
 笑顔も見せせ、さればとて金銀沙汰の物品に厭はれ、念と断ておめく
 手と退さりあど、囃されをば、無念や京町の猫兒にも晒はるべし、且、
 かうしゝ氣性ものあらで、靡うしてからが曲かくしておもしろから

せと、江戸日本橋の佐渡と聞えし本町の分限者廣島屋惣五郎家暮との
 知れど物の行懸り、金銀をくめに無理の風と吹りせ、無得心ある山本屋
 の初梅とひし折りてぞ我袖の移香にしける、
 心と得ざればおにはどの榮耀歡樂も宿醒の朝の食事にひとし、此身の
 腕に様命の入墨と嘗めても、惣五が心盡しの膳の箸のどらぬまでの覺
 悟、ましてや二年ふり通しの枕の手前もあるに、首尾の譯のとの謎にも
 いはせぬ應待こそそれ、淺様ぶにさいものあらば、底と覆して見せらる
 る信實に、よしや惣五が蛇にてもまづぼりと思ひと露さそべけれど、神
 も立合はせたまふ起請の反古にまがさしと、初梅も惣五が實意に絆さ
 れ、ある例の伴發狂り作病り、自暴て飽かれ仕懸の、女人にあるまじきは
 しささき事せせ、姉のごとく幼り妹のごとく冊き、一月餘と一日のごと
 く神妙にふるまふて倦飽色の見えざりければ、惣五更に合點もかき、厭

忌の承知の上にて根こぎにしる遊女、一家に居るとも側への我と寄
 附けまじく嫌ふことと思ひの外ある行爲、まことに白蓮の其の香に其
 色に汚濁なく、大家の御息所とあふがるべき朝夕の行狀、閨房の和熟こ
 そあけれ、その外ハ髻頭から踏皮裏までのこる方なく、われ大事と注意
 の周密あるの女房にもさい圖あり、さりとて吉原年代記にもまぶ見ぬ
 ふり様、かうあらうから冷遇あがら廣物の情もまん更の犬死あらせ、も
 と少意地ぞくからの身請、いづれ好事のあさに觀念せしに拾物ども
 頂くべきと、慾の上に慾とかはかせ、おまじひに否味とまかけて煮か
 りし戀と氷にせうより、果報の氣長く一人寝て待つ間に、時節來らば
 初梅もかのづから咲くべしと勘辨して、そのまゝ添ふて二月と過ぎぬ
 れど少しも變れる様子なし、唯顔色日に衰へて玉骨あはれに瘦せ、氣力
 の減却目に見えて、病苦に賣めらるゝごとし、惣五心と傷めて病狀と問

へど應へて、醫師と薦むれど否みけるが、つひに得堪へてや床に倒れける夕、枕頭ある惣五に所願ありとの言詞に、何ありと聞くべしとあれ、初梅起かへりて膝と正し、眞實この身と不便とおぼさば、賤妾所望の醫師に此一命とまかせたまはらせや、さほどの醫師あらば何とて疾病のかく重らぬ前にいひ出さで、我に仇ある苦勞と懸けしぞ、所望といふほどの名醫、何人ある、唐長崎に住居の人ありとも苦しからせ、即刻招待の衆とさし立つべしと急げば、そのお醫師の遠方からで、つひ竹柴の浦に榮耀のまをさしから、おのれの貧病に惱みながら、我病に、家法の大妙薬と秘したまへば、其許まで此の身と送らせたまはぬ、彼所にさせる名醫、ない理と小首と傾れば、初梅面と脊けすがら惣五と流盼て、粹々懇の病の妙薬に心注ぎたまはざる、紙衣の襖めに思断れせして此の病と少しく眼色變れば、初梅寢床と

そべりおかりて惣五が前に両手と支へ、段々の御信實と餘所にしてかうし、事ゆされぬ義理をがら、淺様との譯、今更すし上るまでもなく、よう御存じあるべし、此方様と粹こかしに、そのでいあけれど、これが尋常一般の此方様から、いかやうにも誑して暇取る術、あれども、生さるる廓の守神と崇めらるゝほどの粹と、二年が間寝こかしにして、初梅の身に罰のあさらざりしと、この廓のお日様の西からでも出らるゝことと、噂さあるほどの此方様の眼がぬるゝものぞ、ひかしさる大將に生獲られさる陸奥の赤にがし、降参と見せて近侍とありそまし、さる雨夜の御微行のお伴に隙と得されば、此時ありと車の内と窺へば、大將そやくと熟睡の跡に、かくまで我に心とあかせたまはぬものごと、我から懇て刃向ひの心折れざりとうや、此方様もその大將のごとく、淺といふ敵の腹心と御存じにて、憎しとも思さぬのみ、甘露とやらと口

移うつにしふまふばりの御信實おんしんじつに垣一重かきいちじゆうの忍出しのいでづるに易やすけれど義理ぎりと
 いふ鎖くさりに繫つがれて一寸いちじゆんも身動みうごをらざるに朝あしたとちく夕ゆふとちく淺あさの姿すがた
 まぼろしに見みえての手招てまがに悶もだえこの胸むねつひに裂さるにやかゝる症やまひと
 の初戀はつこひにてそれより待宵まつよひの夢ゆめに來きまひ來こぬ日ひの文ふみに招まさ逢あふほど
 に契ちぎるほどに末すえと誓ちかひの血起ちぢ請しやうも焼やけ灰はいとあるほどのもの頼たのみ
 がさし目め前ぜん確たし實かある眞實まこと競くわいととかの人通ひととほ詰つむれば此方こなたも劣おとらぞ餘よ所ところ
 の客きやくとふり詰つめ無理むりある首尾しゆびの擧あげ句くの双方たがひの身みの逼つ迫ぱと初手しよてより何なん
 の識しぬでいあし姉あねありし花桐はなとう様さまと歌うた様さまが心しん中ちゆう立たの果はつと見みて戀こひの苦くる
 しさもの遊女あそびめの身みの忘われてもそまじき事ことと平生へいせいの覺悟かくごも其場そのまの益やくに
 いたゞぞ一夜あなよ口説くちせつに別わかれて三日さんじつほど影かげと見みせられざりしと茶碗酒ちやわんしゆに
 凌しのぎてうつゝに仆たれ夢ゆめかや格子かうしまで來きたまひける姿すがたの夜半よなばに嵐あらしの吹ふ

かねものかひとてゆふべまでい歡樂くわんらくの夢ゆめやふれ布子ぬのこに哀あはれとかぶる
 編笠あみがさとい變かはり果はてたまひさる姿すがたと淺あさましや何事なにことと紐ひもらひにも隔絶へたての
 格子かうしに泣なげば運開うんひらきて昨日きのうの男子おとこにもかへらば重ねて逢あふべしと一
 通つうの封文ふうぶんと投なげ込こみ聞きに紛まれて走はり行ゆくと忍しのびの首尾しゆびに聲こゑの立たてら
 れを籠かごの鳥とりの逐おふに逐おはれぞ此こゝの時ときの思おもひ語かたるに言葉ことばあしありがら
 の仇あだある口説くちせつと事こと異いはりまゝ逢あふや逢あはぬの堺さかいに男氣おとこぎの餘あまりに剛強つよさと
 腹立はらたちてい見みされど行水ゆくみづのかへるにしもあらぞさりとしてあれまでの
 契約ちぎりとあきものゝやうに此こゝの心こゝろと知しらぬ何ぞのやうに水臭みづくさくもお
 ちぶれの我が身みに我われと愛想あいそばしつかされたまひて他人たにんもかくぞと僻ひな
 見みの豫想よさくしてう運開うんひらくまで逢あはじとい我われと戀こひに死しねとの謎あやからむ富ふ
 貴きにて戀こひがあるものあら大盡立たいじんりつ腹はらせられて揚屋あげやの鼻はなの泣なく事ことある
 まじきに淺あさ様のしる弊へいにも似にて横よこを物ものの思おもふまゝある内うちの情なさけの水みづも上うぞ

まし味淡くておもしろからねど、親持をれば勘當家持をれば分産の後
から少、真情の見所見せ所といふ時、身と蔭したまひて半歳も音信を
れば、夜毎に逢ふてごに物足らざりし思ひの何とて惱まざるべき、煩ふ
にもあらず煩はぬにもあらず、この一事思ふにまかせぬより萬事に
染まぬ、唯身と墓をみ世と詫び、今にして思へばこの若年にと惜まる
と、その時一圖に佛の道の戀しく、飾と落さむうとの幾度も思ひ立ち
けれど、その人死せしといふにもあらず、添はれぬ義理の柵むにもあ
ねべと、未練に引かれてうろくくと一歳と過ぎけるほどに、さらぬ方よ
りの噂に聞けば、淺様今身の置所なく、竹柴浦の畔に鹽水の小屋がけ
に網をさの内職して、磯に漂ふみる影もかく暮し、まふと知り、人して
探らせしに噂に違ふ所を、こまくと認めざる文に金子と添へて届
けられ、おは舊時、の馴染と捨てざる實情の嬉さと、男泣に泣て返事

下されされど、傾城にかゝるものもらふ理由を、しとて金子のもどした
まひされば、衣類と調へて進せしに、それごに受けられ、折角の好意と
無にそるに似されど、傾城の懐中におのづと金銀の湧くに、あらじ悉
皆客と誑しての不義の財あると、我もむかしの大盡のはしくれ、腐ても
さるもの賞ひがさし、おは又契りし遊女にもあれ、川竹の勤問、其日
その夜の客こそ夫を、おれ通路絶するもの、時節到らむまでの他人
おれば、良人の財と他人に贈るものも受るものも不義の同罪の
免かれ難し、文通とて理に相異、おかけれど、これごけの神に願ふても許
して、もらはで、飯櫃の蓋と膳に茶漬飯喰ふ男の猥樂、おかるべしと
書來したまひぬ、おるほどさうし、お氣性の男おれば、心からぬといは
る、まゝに仕送り、おやめて、文の音信の折々おれば、此方様に請出され
まし、お知らせし、まゝにて、返事と見ねば、様のお思はくも、氣懸かり、此家

と脱けて行かむいやとせけれど、些少の金子に受けざる人の、假にも此方様といふ主定まれる我と寄附けし、まふまじきに、逢ふに逢ひさけれど行くに、行かれ、思惱みての此患病、さりとの憎き女と、御腹癒にもあらば此場にて撲殺したまはるべし、斬殺たまはるべし、いさゝうも恨みとの覺えませぬ、もとより戀に亂れての分別、不正ありと見ても、正路とゆかれぬが例あり、唯死し、る後、見苦しくとも亡骸の淺様へ遣はされて、其人一遍の回向に妄執露れ、あむと眞實の涙と滴しぬ、物五黙念の面と擧げ、殺せから随分殺しもそべし、其方が所望のいづれ？死ぬる、長らふる、かろかや生とし、いけるもの、誰う命と惜まざるべき、さりとしてこの身の百年まで生かしたまふとも、御心に從がはむこと、思ひも寄らせ、さるともあは未練に生かしかた、まはむ御所存、千人、千人、思籠みて、靡りせ、でおかぬに名うての伽羅男、不束、あ

る初梅風情と身請まで、あぐらふられ、うとありて、容易からぬ名折、此心の淺様のもの、あれば、せめて、この命ありと召して、男の一分と立て、たまへといへば、出来ざる申分、あ、あるほど、一旦の意地より、根引せし初梅も、性に合はざる土に、裁ゑて、色香衰へ、思ひしよりの風情、あ、かくて、やがて、籠の煙とせむ、まこと花と愛づる人の心、にあらじ、此所の粹、こがしに、轉されても、暇遣らむほどに、早く行て、淺に、添へ！と、氣色も損せ、せ鷹揚、ある言詞に、肉動き、身毛立ち、盲者の日と見る、想して、このお情の、ほどの初梅誓文、忘るまじくといへば、物五笑ひて、懷中より、百両取出し、有合せの、簪引出、少あけれど、淺殿へと、あれ、初梅取上げて、推戴さ、淺様に、代りて、御志、ごけと、請けまして、これ、おもどし、まとし、まそる、此身に、暇賜ひて、つかはさる、ごに、御恩、重く、おもはる、べきに、かうし、物と持歸り、あ、叱らる、べし、紙衣への、嫁入、あれ、バ、腰衣の、ま、こ、そ、似合し

けれと、亂髪も梳りて其夜の未明竹柴浦へ駕籠と飛ばしぬ。

(中)

廣島屋の惣五郎初梅と身請して二年と経ぬ間に、出雲の淺と晒ひし紙衣さる身に我もかり果のしやう事あしに、端午の節句前とて菅浦くと町々と賣りもけべ、第一に呼入まれし家にてわづかや價ざられ、廣惣が賣るほどの菅浦の小判十枚でも廉かるべきと、口惜しがりてそこそこに立出でしが、他のあやめ賣と見れば、一文二文の掛引に腰骨の痛からむほど身と屈め、追従さらさら商へばこそ買ふ人もあれ、我一人が菅浦賣にもあらねば、これも傾城買の秘傳に違はせ、金出して買ふものあれば、下女婢僕遇かひしても子細のあるまじきに、それの野暮とて雷のやうに厭はれるべ、賣る身の世辭のあはあるべき事と、伊達鍛の根性と挫くも貧あり、捨てにし金銀の難有味が、今にしてやうやく知れより

と打笑ふて、おは菅浦くと呼びもければ、後より聲と懸るものあり、此願あめりとお小腰と屈め、おめしあされまそりと揚屋の男が口上めかしく、我れあがらいたしくもいつて退りと思ひぬ、呼留めし男の吉原風俗、何所やら江戸町の露平が面影に肖りて見れば、其男進寄りて詞と卑くし、もしお人違からばおゆるし下され、此方様の本町の廣惣様でござりませぬりと、孔の穿くほど瞳と凝らさるに、面羞く、察に違はせ、此奴いにしへのわが露に濡地の下草、流石に見識りて言葉とかくると、おははらしき男と思ひあがらかり果つるにも、節のあるものと、此風俗して廣惣との過去りさる名聞の瑕瑾とわざと眉と擦め、わざくし、奴の小石川の奥に長年住む四郎助といふ百姓あがり、廣惣様あどよん思ひも寄らせ、此方様ごときにお知己の御大身にわさくし肖ましとあるから、不日よい目が出て、御意得まそる時節もあるべしと、そげあく行かむと

そると引留め、お裏みあると、恨めしきお心かき、それがしと離れと、
 思しめさるゝ名乗るとてもとより聞えぬ奴あれど、ありしむうし、此
 方様の四天王とも呼ばれ、股肱耳目とあまやかされし、江戸町露平が一
 弟、たとへ見る眼、曇るまでも、渾名もさふらふものと、鬚鼻の彌八、初梅
 様御秘藏の名香まつ宵のうつり香、今は御肌に馥郁たるよ、まるべに、
 廣惣大盡とのお見請けまじしといへば、廣惣からく、と笑ふて、
 これの迷惑至極を、此方の鼻がせれば、どの名物か、知らねど、汗の香が
 伽羅に匂ふとの阿蘭陀舶來の珍品御重寶ある御鼻、随分大事にあされ
 と行かむと、そるとおは引留めまじく、裏ませまふり、廣惣大盡に動
 うぬ證據のと、飛懸つて惣五が二腕引まくれば、惣五が初枕のおもはれ
 八十九にして病死せし千歳やの藤原が一念の封印、自筆の戀といふ字
 と入墨の痕、鮮明あると、これまでよく存じよる彌八も、はや遁れぬ所と

おかしの御名と聞かせ給へとあれば、惣五もこれまでと覺悟して問る
 るこそ、羞かしけれ、まことに廣惣が榮華の夢の寐覺の身、そちの見忘れ
 されど、露平が弟う。おはせの通り、兄め、御傍さらせの一人ありし
 に、私めの折々おあがれと頂くと、冥加にせし程あれば、お見忘のさもあ
 るべき事、扱又、大盡が變りし御姿あやめ賣とのせうし、御趣向と訊
 ぬれば、家暮事戀の揚句、誰もかくあるべきぞと、西に傾く日脚と仰
 ぎ、談話の盡きねど、一刻とあらそふ際、物賣ひかしとの違ふぞ、今日、此
 にて別れむ、露平にもよく傳へてくりやれと、與りさければ、物なをし、當
 坐の祝儀どと、菅蒲一束取らせて、後とも見せして、小路に遁入りぬ。

(下)

落ちかゝる軒に蚊柱立ちて、柳にも風なく、やぶれ垣根の霧島月におぼ
 ろある夕、晝おそく洗ひし浴衣の生干あるに、惣五赤裸にあれば、蚊のう

るさゝに、裏へ蚊遣木取に行きてもどれば、門口に一人の沙門笠深く打冠りて、行むの、勸化ウ御無用と入らむとせしに、此方様の確かに廣島屋の惣様と、おまめかしき聲にふりむき、お比丘尼殿に知人の持さざる惣五、誰様ぞと言も了らざるに、比丘尼の笠もどらで惣五が腕に絶りつき、お懐かしやとばかり聲と放けて啼けば、惣五の呆れ惑ふて言句も出で、さま／＼に笠の内と覗けと聞て、見えざれば、心得ぬ、惣五が舊時と御存じの此方様の？　あやなき闇に香も失せぬればと笠を取りて、落飾縁を頭顔と撫で、初梅と名乗るの、夢よりもおは信じしからねど、まづ懐くしき顔と見せよと手とりて引入れ、油をければ蚊遣火の影に坐ゑて、紛れもなき初梅！惣様と、鼻と相抱ふてぞ涙に暮ける、初梅やう／＼顔とあけて、ようもかくまで、尾羽うち枯したまひけるよ、と、け鬘に埃白く、耳根に垢つもあり、髭鬚の棒のやうに生びて、顔に見

馴れぬ、顔も頬の瘦も、悉苦勞めが、おそ業う、いかに人の行末のはかられねばとて、此有様の何事ぞや、男の裸百貫これも一時と苦にのからねど、人事よりの其方々姿、さる物もあるべきに、風法衣との心得が、しもしも浅く身上に凶事もやと問へば、初梅はらくと泣と流し、果敢なきもの、人の命、可愛や浅く死亡し、されば同じ道にとも思ひしが、此人ありさればこそ、此方様に無理ある暇も取りされ、心のぬしあきあとの此方様といふ、此身のぬしあるもの、むざ獨り死ぬべきにあらねば、此方様に逢ひまして、お意中とも聞かまほしさに、本町へ尋ねて聞けば、其家のおは在りあがら主人のかはりて、先代の行衛知れどと聞くに、悲しさ、是にいよく、泡沫夢幻の世と観じて、浅様が形見の破屋と庵室に、念佛三昧の心の中と不便とも思はで、われと吉原の初梅と知る人ありて、好色の人、蠅折々尋ねよりて、うるさき事限りあし、とり

わけ執心深き近き所に隠あき分限者の子息手と盡くして口説かる
 るに疎ましく庵室と捨て、町々と托鉢の朝あやめ賣の背よりと見し
 の此方様あり縁盡きせして再會の歡喜よりも名ある太夫に揉せし腰
 と下人に曲げてはし、銀はしげある顔色のおいとしさ、人一倍寛濶の
 お心にも御辛抱のあるまじき所と、夫に法衣の袖と沾らして、初梅が
 心中と立つべき時と思案せし、才覺の途なく、差あさりてのお住家の
 知りよさに此所まで寢ひ来て、うかくと竹柴浦の庵室にかへればそ
 の男おは尋來り眞實のほどと語りてやまざるより、珠數と引斷りて身
 と委せむ事と誓ひて、兩の袂より百兩包二個出して、物五ヶ前にさし
 おき、身代とてもらひ受けましたれば、舊時あらば石瓦にもひとしさ小
 額あぐら、今のお身に、當分の入費にもと、さし出がましくも初梅が苦
 心とお納り下されましと封金とおしやれば、物五眼とまばたき、口惜

や淺と嗤ひし我も淺に嗤はれ、初梅この金の納めがさし、其方みづろ
 ら好みて還俗せむといふとも、淺に添はせしほどの物五の見ぬ顔のあ
 るまじさに、いさゝかの粹立と恩に被せて、佛弟子と破戒させて不淨の
 財までわが物にせむかど、朽ちたりとも廣物の男子あり、この金子の注
 へかへして珠數の緒と繋ぎ、明日の亡母が命日にもあれば、まゝ尋ね來
 て其方が讀經と聞かせよといへば、初梅笑ふて肯かぞ、落魄ても粹の粹
 め、情深い事いふてこのお比丘尼と地獄へ墮さんとの惡洒落くと、藏せ
 し吸筒の口と拵りて、まゝ不時離別の盃とさそ、物五とらせし執盡
 しと金詩繪の朱塗の小盃、變るゝ人の身上！

大珍話 浮世談義

脫天仙人所記 蝸牛庵主筆記

あちらでも美人こちらでも美人と扱もやかましい美人呼はり、浮世の美人で持ち切
 つゝ様子、男の中にて此通りあればまして三人よれば姦しと相場の付る御嬢さま
 奥さま後家さま御隠居様おさんどん様たちの中でいざればど又好男子美少年と男の
 噂として居らるゝり知れぬ、兎角いの一癖の其いの字の色のいの字、どうでも世界
 の是が第一の知らねども又行き過ぎの沙汰にあつては食氣から食傷といふところ
 と色氣故の御放埒二十一年と最期としての往生安樂國、乃至の器量好みの三十衛身、は
 うけの茅花の顔を眉つさして居らるゝ方様おと餘にいとしい譯、又それより可笑
 さい碌でもあさ男が美男とありさがり木地の悪い女が美女とありさがりての穿鑿
 て、色に役はるゝが人との云へ石鱗と唐物屋で吟味し蛇退皮と薬舗に尋ねッレ烏瓜
 絲瓜の皮美男蔓木賊の皮との辛苦琢磨、愚老おと元來夕此通りの賓頭盧
 然鉄拐乎る色男おれは構ひませぬが他所目からも御察しやを御辛配、そこを付込

んで美男に在る法の拙者が胸中にあり美女に在る藥の私方で賣りませ色と白くもしてあげませる、鼻と高くもして進せるお望みあらば眉毛と三本にしてもあげませ肌羽二重餅のやうに弱らうにも御茶碗のやうに滑澤にもありませさア、お來臨をされ業平や小町と製造いさしの私元祖でござりませ本家本元正統正銘美男美女仕上所の此家でございと大きな看板とかけ旗とたてて天下を驚かしする利口者がござりませして各々様方と是のとばかり云はせざるが愚老大道に斯く店と構へ五郎兵衛志道軒が流れと汲みて戸隠子もあく玄關も門構へもかいどころで明ッぱあしに色男に在る秘傳美人と化る妙法とお話し申を以上、彈りあがら他所ほかの極意など無錢で何程も教て進ませ假令色と白くしといと仰せあるから宜しいり砒石と一日に一斗六升づゝ召上れ鼻と高くしといと仰せあるから御傳授やそぞ土鼠の卵子と鼻の孔にお畜ひさせられ、このやうな事から何でもお教えやしませ、上根の八々の終までお聞かせられ中根の半分下根の入口づけにもせよ能く覺えて篤と御思案の上お試しなされ愚老秘傳に嘘のつはりのござりませぬ必ら妙法の利益のござりませる。扱まづお話しと致せからに物の順序で美女美男と一體どういふものうといふこ

どよりお話しやさねばかりませぬが美男とやせば今日までのところ日本で業平や唐で彌子取り其他うぢやく居りませれど所以因縁講釋たッぷり有難味の多いがさんと不思議でいござらぬう、ぢやんがらもんがらちぢれッ毛の御釋迦様でござるて、三十二相八十種好とて人相書に骨の折れる程の色男が縮れッ毛とい少し怪しい事をれど其方が天竺第一の色男であつたとして見れば耶輸陀羅、摩耶、摩訶波闍波提とどいふ美人達も多分縮れッ毛でござつたらうに縮れッ毛と氣にして、大きに癩癧と起さるゝに當らぬ、桐の葉の莖と一寸ほどづゝに切つて湯に浸し夫より出るぬらぬら水とどお髪と洗ひ玉ふてわざと癖と直さるゝに怪しからぬ不所存でござる、さりとて鉄火箸と焼て特に縮れさせらるゝに如何にも笑止おおもひ付、衛后も衣通姫も其儀おことおさらさかッの筈、是のまさり話しが横道に折れましうがまづ大概に當世流行のどころより割り出して美男の姑く除き美女の身体の道具立と片ッのしから數へて見れば第一眼の形まづから第二白眼青みと帯び第三黒眼の瑠璃の如く第四睫毛短からせ五月蠅からせ第五眼づかひ端正にしてちよこせ第六鼻端正にして骨だゝせ第七鼻孔過大からせ第八口の小にして然も尖らせ第九唇の色紅く

第十口元締りよく第十一齒純白にして鬪齒なく第十二齒齲あらはれ第十三口熱なく第十四耳つなきはらしく第十五耳音の高低を能く分つ、是の聾でなくとも高低の分らぬもの多き故第十六の髪毛漆黒第十七の髪毛素直に長く第十八髪際能く揃ふて然も急に濃からせ第十九領足短からせ馬鹿長からせ第二十眉毛濃からせ疎からせ第二十一眉の形如新月第二十二面色白くして淡紅を帯び第二十三面道具の釣合これ大切なり第二十四面上をばかそなどの汚點なく第二十五額肉也たかに骨あらはれせ第二十六額狭からせ廣からせ第二十七額骨高からせ第二十八腮張せこけせ第二十九下領尖らせ第三十頸長からせ短からせ第三十一軀幹端正第三十二總身肉柔かにして露骨からせ第三十三總身皮薄く鮫肌からせ第三十四同く色雪の如く白く第三十五皮膚一切の病なく第三十六手指纖くして節たゞせ指間充密第三十七五指柔らかにして食指と小指と觸るべく第三十八爪硬からせ大からせ端正に第三十九爪色紅く第四十足の甲高からせ踵出張らせ露骨からせ第四十一足の五指端正第四十二聲音清く第四十三言語明晰騒がせ灑らせ第四十四毒語と放せ第四十五卑語と出させ第四十六肩のまやもの如く張せ第四十七唇の膠の如く大からせ第四十八乳房猥に大なるべからせ第四十九生殖器健

全第五十遺傳惡疾なく第五十一起居禮に叶ふ第五十二近視眼遠視視不等視眼からせ此五十二相と具備し者いまづ何處へ出ても天晴女一人と感張れるあれとも夫が見世物からせ美人にあらせ、以上陳ふる五十二相中に直と眼に見えぬものもあれど又美しいといふことに關係のあいやうなものもあれど第四十二四十三四十四四十五等の相の助けにて相にも形相無形相の二つあり、眼鼻などの形相として形の種々による相、血色聲音などの無形相として形の無い相、無形相の中にも靜相動相として音聲の靜相語氣の動相、こゝらと發明せぬやうな事での美人も醜婦も判るものにあらせ第五十一の動相五十二の靜相第四十九の唯假りに三十二相の故例にあらつる譯あり。さて是よりの愈々美女にある法とお教へやそ、美男にあるも同じ理屈なれば其心して聞き玉へ、されば是で愚老何とお教へやそ、白附子と酒にて鍊て寢際に塗きされ又その硼酸水が能く効をそにきびとそれでおどりあされ、章魚とでも水がひびによろしい、ふそまの玉子糠と同じにきよまそ、あせばとて胡瓜の切口で擦りたまへ、干瓢と湯に浸して浴後のそれで顔と磨きたまへ肌目が美しくしかりお白粉が能くのる、鶏卵の蛋白と紙に引きて其の紙と小まかく切り糠ぶくろに入れて用ひ

玉へ皺しわが無くなかりまと、毛生けぐそりの莞青けんせい丁てい幾き、眉毛まゆげの薄うすいの猪口ぶちぐちの印しるし付つきさる
 書學鉛筆しよがくえんぴつで少せうし塗ぬり玉たまへ濃こく見みえまとるぞ、唇くちびるのあれるに紅べにとわせりんで解といて
 塗玉つたまへ、血色けつしよくの悪わるい人ひとの毎まい日にちさるさ越こ幾き斯せと飲のみみ玉たまへ、指ゆびの爪つめ一ひとの字じに缺かみ切きつ
 元祿げんろく好このみのまはらしいところでさざる、昆布こんぶの黒くろ焼やきが毛けのあげるのと止とめまとと此この様やう
 奇事ことが例れいの美男びなん美女びよにある秘傳ひでんとあつての他よ所ほ外げの立た開ひらけの先せん生せいから知しぬ事こと、愚ぐ
 老ろうにあつての遺恨ゐん千せん萬まん、愚老ぐろう男おとこ振ふりに關くわんする譯わけでさざれば夫それ等らの傳授でんじゆの唯ただ話わしの景氣けいき
 におまけとして御教示ごけうじ申まをしさことと覺おぼしめさるべし、愈い々よく是これより美人びじんにある骨髄こつずい眞ま
 傳秘密でんひみつの法はふと御話ごわし申まをしさけれど扱さて直ちやう直ちやうのところと早はやく申まをせば美人びじんにありさがる方かた
 方かたのお望のぞみと伺うかがつてら御傳授ごでんじゆいさなね折角せつかくの教示けうじが見當けんたうちがひとありて役やくに
 たらざら一たい体たいとこの國くにの何いづ時じの時代じだいの美人びじんにありたがつて糠ぬかや砥粉とと御苦勞ごくろうあそばさ
 ることう前ぜんにもあつし天竺てんたくの美人びじんの縮ちぢれ毛け又また亞弗利加あふりかの美人びじんの眞黒まっくろにエスキモト
 の美人びじんの丈たけが低ひくく檳榔びんらう子こ食くふ國くにの美人びじんの齒はが黒くろしサア何いづの國くにの美人びじんが眞まの美人びじんが眞ま
 洋やうの美人びじんの佐渡さだが島しまの瓢箪ひょうたん攻せめに逢あつさやうで支那しなの美人びじんのあんよがお下手げたで手ての小こ
 指ゆびの爪つめばかり長ながいと怪あやしいく、又また日本にっぽんから日本にっぽん一いつ國こくの中なかでも何いづ時じ頃ころの美人びじんがま

ことの美人びじんが西鶴さいかくの美人びじん生なれついて洞長どうちやうと書かれど當世たうせい洞長どうちやうの流行はやりりまとる柳やなぎの
 腰こしをよかか昔時むかし美人びじんに洋服やうふくの淋しみしかるべく丸まるぼちちやに黛ざいとさせさら如何いかにからむ
 サア何いづの時代じだいの美人びじんが眞まの美人びじんが怪あやしいく、いへ今日こんにち唯ただ今いまの日本にっぽん東京とうきやうの美人びじんが眞ま
 の美人びじんが何いづの骨ほねと折おつて亞弗利加あふりかの美人びじんにある馬鹿ばかのあるものうと云いはるよう知しら
 ぬが明日あしたの流行りやうの今日こんにち分わらば假令たとへ顔かほの造作ぞうさくと改良かいりやうするの愚老ぐろう腕前うでまへ盤ばんと鉄砲てつぱう鎗がらうと
 持もてば忽たちち譯わけさく成就じゆじゆさせて進しんますべきれど明日あしたます流行りやうが變かはつて富士ふじ額がくと雁金かりがねにい
 たし明後日あしたます富士ふじに仕更ししやへます雁金かりがねます富士ふじます雁金かりがねます富士ふじといふやうな工合ぐあひ
 での治さりが付つねばちと困こまつさもの、それはど苦勞くろうとしても流行りやうの度たぎとに雜作ざうさく改良かいりやう
 のままよし御齡おとしとどらるよう笑止せうし千萬せんまん、徐秋濤じゆしゅうたうが美人びじんの譜ふにも美人びじんの艶所えんじよの十三歳じふさい
 より二十三歳さいにある只十年じふねんの顔色かほいろありと云いふさ通とほりやれくお氣きの毒どくを事こと、然しかも一
 の容ようありて二の韻三の技四の事五の居六の候七の節八の助九の饌十の趣しゆとそれだけ
 具そはるのまアノ望のぞみをし。がらりと向むかひの變かはつさ方かたから見みれば美うしいも醜みにくいも其その當
 人ひとの手柄てがらでもあければ過誤あやまちでもあしされば愚老ぐろうの考かんがへの其その當人たうじんの手柄てがらで美うしくあつ
 さい父母ふぼの手柄てがら(P)で美うしいよりも美うしく其當人たうじんの過誤あやまちで醜みにくくあつさい父母ふぼの過誤あやまち

(P)で醜さよりも醜しとはか思へど、そこで御當人のお手柄より美しくある法とやせば能く聞き玉へ、虚言にあらざる相の種々の法によつて變るものあり、合点の行やう例と申さば劍術者の眼の据り船乗の眼の遠く利く是等の事によりて動相の變るあり三絃と習ふものゝ爪に道あり車夫の掌にまめあり是等の事によりて形相の變るあり傾城の血色悪く馬士の大聲の事によりて靜相の變るあり大酒家の鼻赤き物のために靜相變り魔睡劑飲まされし人の語氣わやしき物によりて動相の變るあり雪にやかれて足の指隠る物によりて形相の變るあり、砒石と飲みさるる根と用ゐるの即ち物によりて靜相と變んとするの術毛生薬と塗り造鼻術と施す物によりて形相と變へんとする法寒稽古に勵みて唄と習ふ事によりて靜相動相と變へんとする術、大抵世間ありふれざる美人にある法の物と頼むに過ぎざ脱天一流の一物とも頼まざして動相靜相乃至形相とも變へば奇妙頂禮確實の妙法謹んで聽問われよ、相の唯物と事とによつて變ざるのみならず實に大に心によつて變るもの、心次第で鬼にも蛇にもかれれば神にも佛にもと昔時の人の云ひ置られれば扱角も生ると見ゆるし清姫の様に蛇体にもかれりし後光かやく佛菩薩三十二相具備のものにもあ

れると見ゆる、冗談の措て實のところ清の張必剛といふ男が妙いことと云てある、容色詞氣の氣質の兼受蘊積よりして生る氣質剛なれば容色詞氣の發する剛に偏せざるかし氣質柔なれば容色詞氣の發柔に偏せざるかし云々と論じて其後に陰と陽と互に以て積し交以て濟せあはざれば則ち必學問と以て之と變化し互根交濟せしむと説きよるの面白し理屈、容色詞氣といふものゝをうしても心の變形に相違ないの短に云て見れば怒ツさものゝ顔赤く悲むものゝ顔蒼く、奥様の嫉妬に膨れ面とあり玉ひ旦那様の浮れてでれそけ面とあり玉ふ道理、仔細に觀べ一日同じ價の美しくさで居る人もなく同じ價の醜さで居る人もなし、さア茲で人相見が大きな眼鏡とふりまはせる譯も少しあり假令平常子なきと憂ふる人ありとせんにくよ、物世の常として眉と皺め八の字とよせれば自然あやしき筋出來てそれと人相見の方で印堂に何といふ字の紋あれ即ち子なき相と心得其まゝ折ふし云ひ當もそるあり許負唐擧等のをうして鑑さう知らぬ孟子も其言と聽き其眸子と觀る人焉、ぞ度さんやと云はれされ即ち其言其眸子其人の心とあらはせものとおもはれに相違なし居る氣と移し養ふ體と移すといふ言葉も最一足踏込で言ふら居る氣と移し氣の體と移し養ふ體と移し體の氣と移すとまで言へぬこと無い筈、宋豫菴が觀人法に全く

唯動相よりして観るのみなれども動靜形三相連環の如く離れぬ關係あれば強ち一に其色と辨じ次に其聲と聽き更に夫神と察し再び其肉と見ると委く説さる神異賦が嘘でいあるまじ動相の靜相と移し靜相の形相と移せば語氣烈しく小兒と叱る繼母の漸漸其聲色惡くあり又漸々其唇の邊も惡くあるに相違かし麻衣相法に氣乃ち形の本と説さるまことに名論まことに名論、神清めば則氣和し氣和すれば聲潤ふ深くして圓鳴あり神濁れば則氣促り氣促れば則聲焦る急にして輕嘶ありと聲と説さるも亦名論、斯の如ければ心と相との關り合へ大抵もうわかり玉ふ筈是れより先きのあり申さじ、能く實際にて御工夫あらば大凡合点がまゐらるべし、最早云ふべき時間もあければ詳しき事又として前に陳さるあらましとつゞむれば相の心の符あり故に相と美くせんとせば心と美くせざるべからぞ心と美しくすれば相の自ら美あるべしといふことあり、尻切れ蜻蛉の浮世談義茶利が多くて肝心のこゝらで終りもまゝ是非あしむらやら尻がまどまらねば布施經と出して止むべし經中曰く慈心と以て施さんには顔貌和悅諸の瞋恨なきと得んと、尙同經第二十八二十九三十の節に三十二相八十種好と得べきことと説きあり見さいお方の讀つしやれ、美人にある法奥の許しにそれにありく

とはり

東京銀座一丁目一番地 日 就 社 印 發行人 編輯人 鈴木光次郎 田島章次郎